

小学校特別支援学級における自立活動「なかよし音楽」の取り組み(2021) －気持ちの安定を図り、他者と表現を分かち合えるような音楽活動を目指して－

和歌山大学教育学部：菅 道子(研究代表)、上野智子
嶋田倫太(学部4回生)
和歌山市立楠見東小学校：木下由香利、辻 あゆみ
竹内由里子、山本佳代

1. 研究の趣旨

本取り組みは、音楽活動を取り入れた「自立活動」の実践を通して、特別支援学級における授業づくりの可能性や支援の在り方について、大学教員と公立小学校教員の連携によって実践・検証しようとするものである。本年2021(令和3)年度は、昨年に引き続き2年目の取り組みとなる。

学級に在籍している児童は、人との関わり方や情緒の安定等に様々な困難を持っている。そんな中で、音楽を通して気持ちの安定を図り、他者と表現を分かち合えるような音楽活動を体験させたいと願い「なかよし音楽」の時間を設定している。計画案を練り、授業後は協議会をもち、成果と課題を具体化しながら授業構成を検討していった。今年度も、児童たちが安定したコンディションを保ち、信頼関係を基盤にした中でコミュニケーションを図ることができるよう、取り組みをすすめた。

2. 研究の経過

2021(令和3)年

第1回目 8月11日(水) 本年度の取り組みについての説明と検討。

第2回目 11月22日(月) 授業(小学校側) 参観と協議

第3回目 12月9日(木) 次回授業についての検討。

第4回目 12月13日(月) 授業(大学側主体)の実施と協議。

2022(令和4)年

第5回目 1月20日(木) 報告書についての検討。

3. 自立活動「なかよし音楽」の取り組みについて

(1) 児童について・・・16名

なかよし1組(知的障害学級6年1名、5年2名)

なかよし2組(知的障害学級4年1名、3年1名、2年4名、1年2名)

なかよし3組(自閉症・情緒障害学級4年1名、3年1名、1年2名)

なかよし4組(肢体不自由学級5年1名)

(2) 目標

- ・音楽活動を通して、人と心を通わせる楽しさを体験する。
- ・ルールを守って活動することで、自分も他者も気持ちよく過ごせることに気づき、積極的になおかつ安定した気持ちで取り組む心地よさに気づくことができる。

(3) 支援

- ・音楽活動に参加できるよう、個々にあった声かけをする。
- ・活動内容がより分かるよう、視覚的支援となる教材を準備する。
- ・身体を動かす活動を取り入れ、やる気を引き出す。
- ・ルールが守れた時にはほめ言葉をかけ、意欲を持続させる。
- ・リズム打ちや楽器演奏等で一人ひとりの児童の承認の場を設けて自信を育てる。
- ・一人ひとりが役割をもってリズム打ちや楽器演奏を行い協働することで、一つの音楽表現をつくりだせるよう支援する。

4. 実際の授業と省察

「なかよし音楽」(自立活動)は月1回のペースで2021(令和3)年6月から2022(令和4)年1月までに5回実施してきた。

ここでは連携事業としてカンファレンスを行った2回の授業を取り上げる。

(1) 11月22日(月)の「なかよし音楽」1時間の流れ

- ① あいさつ……一人ずつあいさつしよう。
- ② なぞなぞソング…耳をすませよう。
- ③ リズムリレー……みんなでつなげよう。
- ④ えんそう……心をあわせよう。
- ⑤ プレイソング……身体を動かそう。
- ⑥ あいさつ……心を落ち着けてあいさつしよう。

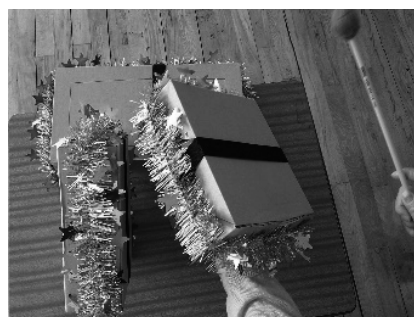


写真1 空き箱を利用した「ボックスドラム」

(2) 11月22日(月)の授業概要分析

活動	めあて	児童の様子	省察
① あいさつ 《こんにちは》	・気持ちのいい朝のあいさつをしよう。	・素直に声を出さない児童がいたが、順序良く一人ずつ「おはよう」のあいさつができた。	
② なぞなぞ 《おたずねソング》	・耳をすませて聴いて考えよう。	・先に答えを口走る児童がいたが、「わからない」と首をかしげている児童もいた。全員が静かに聴き、真似をして歌っている様子が見られた。	・しっかり耳をすませて聴いている姿が見られた。 ・答えを聞いても意味が理解できず謎のままの児童がいるので、解説が必要であった。
③ リズムリレー 《すきな教科》 ・まねっこリズム	・一人ずつ好きなものを言って、みんなでリズムをつなごう。 ・聴いたリズム、強弱をまねて打とう。	・自分の好きな教科を考える時間をとったことで、ほとんどの児童が発表できた。また、ホワイトボードに教科や児童名の札を貼っていき、視覚化したことで、どの教科が人気があるのか、誰と同じものを選んだのか等、興味をもって友達の発表に耳をすませることができていた。 ・「ボックスドラム」(写真1参照)を、楽しそうにリズムよく打っていた。なかには常に大きな音を鳴らそうとする児童がいた。	・一人ひとりの声に合わせてたずねていくことで、児童の発表を促せていた。 ・児童たちの前に先生たちに尋ねることで、どんなふうにするか見通しが持て、安心して発表することができたようであった。 ・次回は強弱をもっと意識させたい。 ・箱に穴を空けてしまった児童もいたが、マイ楽器として大切に扱うよう指導していきたい。 ・中に鈴やドングリを入れてオリジナル楽器をつくることも考えていきたい。

④えんそう 《たいこをたたこう》	・自分の出番を意識して、リズムにのって、たいこをたたこう。	・赤組と白組に分かれて、8拍→4拍→2拍→1拍ずつを交代で打つのだが、合図を見ながらほとんどの児童は出番を意識して打つことができた。「ボックスドラム」を手に持とうとしない児童には、大きいタンバリンで、最後のリズムをたたいてもらうようにした。タンバリンの出番は1回だけであるが、それに集中して演奏するのを楽しみにしている様子であった。	・この曲は2回目となるが、1ヶ月以上空いていたこともあり、こちらからの合図を待つ児童が多かった。慣れてくれば音楽のフレーズに合わせて演奏できるのではないかと期待している。
⑤プレイソング 《ドレミの歌》 (ベギー葉山作詞・R.ロジャース作曲)	・音高を意識して、手や身体を動かそう。 ド…膝の横 レ…膝の前 ミ…腰 ファ…胸 ソ…肩 ラ…ほっぺ シ…頭 ド…ぼんざい	・指導者の真似をしながら、だんだんと手や腕を高い位置に動かしていき、自然と口ずさむ姿が見られた。音が跳躍する部分では、難しくてうまくできない様子も見られた。見学者の大学教員とともにオルガンを弾いて参加する児童もいた。	・1年生のお世話をしつつ活動に参加することが多い児童が、本活動ではオルガン演奏で承認欲求を満たしていた姿があり、そういう場も組み込んでいけたらいいのではないかと考える。
⑥あいさつ 《きょうは終わり》	・心を落ち着けてあいさつしよう。	・クラスごとに「きょうなら」とあいさつし、次時へつなぐことができた。	・この曲のメロディーや雰囲気は、児童の心を落ち着かせる働きを持っているようで、2時間目に口ずさみながら静かに学習に取り組む姿が見られた。

(3)12月13日(月)の「なかよし音楽」1時間の流れ

- ① あいさつ……一人ずつあいさつしよう。
- ② かんしょう……耳をすませよう。
- ③ そっきょう……一人ずつならそう。
- ④ きいてうごこう…音楽にあわせて動いてみよう。
- ⑤ がっそう……みんなでならそう。
- ⑥ あいさつ……心を落ち着けてあいさつしよう。

(4)12月13日(月)の授業概要分析

	めあて	児童の様子	省察
① オープニング あいさつ 《こんにちは》	・気持ちよく朝のあいさつをしよう。	・大型テレビにプログラムを映し出したものやクリスマスの飾りがある雰囲気、いつもよりもわくわくしているようで、しっかりと挨拶ができた児童が多かった。	・なかなか返答しない児童にどれだけ呼びかけるか、難しいところである。児童の気持ちに寄り添った対応が必要になる。
②(鑑賞) 《樅の木》(シベリウス作曲)	・耳をすませて聴こう。	・大学生が演奏している姿を目の当たりにして、静かに耳をすませていた。	・半円になって座っていたので身体の向きを変えて鑑賞できることを事前に伝えておけば良かった。
③(器楽・即興表現)	・一人ずつならそう。 準備… テーブル	・1年生から順に4人ずつテーブルドラムとその他太鼓類の周りにすわり、教員のかげ声に	・初めて見る大きな太鼓に興味を持つ児童が多い中、素直になれず呼びかけても太鼓に向かわない児童がいた。どのように声かけするか難しい点であるが、

《シェイク・シェイク・ミュージック》	ドラム ボンゴ、 ボックス カホーン、 ギャザリングド ラム	<p>従って一人ずつ自分のリズムをたたいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめはおそろおそろドラムに触れてみる、といった感じだったが、慣れてくると自分なりに前や横のドラムに積極的に向かっていく姿が見られた。 ・学年が上がるにつれて、いろいろなリズムをたたく児童がいた。 ・リズムに個性が表れ、友達がどんなふうにとたたくのか、温かい雰囲気の中で興味をもって聴いている姿が見られた(写真2参照)。 	<p>今回は全員がテーブルドラムに向かうことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーブルドラムの周りにボンゴなどの打楽器を並べていたので、4人の座る位置が分かりやすかった。 ・1年生は、一人一回ドラムに触れるだけだった。中学年の何でもやってみたい児童からスタートするとまた違ったリズムがうまれただろうと思われる。 ・全部で4回あったが、最後まで友達がどのようなリズムをたたくか興味を持って聴いていたのは、落ち着いて音楽に向かう姿勢ができていたのだと思う。
④(身体表現) 《そりすべり》 (アンダーソン 作曲)	・音楽に合わせて動いてみよう。 準備...布(ブレイクロス)、 CD	<ul style="list-style-type: none"> ・指名された児童が輪の中で布を左右に振ったり回したりして、みんなでその真似をしながらか踊った。 ・どの児童も輪の中でいきいきと楽しそうにリーダーの役目を果たしていた(写真3参照)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・布(ブレイクロス)があることで、即興的な動きを引き出すことができた。 ・普段控えめな児童も、いざ指名されると張り切って自分なりに工夫しながら活動しており、児童の新たな可能性を感じることができた。
⑤(合奏) 《ひらぎかぎ ろう》(賛美 歌)	みんなで鳴ら そう。 1年 フラッグ鈴 2年 カラー チャイム 3年 バスブロックバ ー 4年 テーブル ドラム 5,6年 ウィンドウ チャイム フィンガー ベル	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの学年に教員や学生がつき、奏法やリズムを練習した。初めはマレットを押さえつけていた児童も徐々に跳ねるように動かしていい音色で演奏できていた。 ・教員の合図でそれぞれの楽器を重ねていき、途中でフィンガーベルに耳を澄まし、また後半みんなで演奏し、1曲の合奏が仕上がった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な初めて目にする楽器を前に、興味津々であった。事前に誰がどの楽器を担当するか決めておいたことで、さっと楽器を手にし演奏に入ることができた。また、楽器担当はこちらが配慮していたことが見事にマッチングして、どの児童も喜んでその楽器に向かっていった。 ・時間があまりなく、1回の演奏で終わったが、できればもう1回合図に合わせて合奏を楽しみたかった。
⑥ エンディング 《きょうは 終わり》	・心を落ち着けてあいさつしよう。	・「バイバイ」のところでは手を振り、静かな気持ちで終わることができた。	・心地よいメロディーにのり、心を落ち着けて終わることができた。その後の授業中に思わずこのメロディーを口ずさむ児童も見られた。

※アンコール《紅蓮華》 大好きな曲を大学生のお兄さんが演奏してくれるとあって、大喜びで鑑賞することができた。その後の楽器の片づけを率先して手伝う姿も見られた。



写真2 一人ずつならそう(器楽・即興表現)



写真3 音楽に合わせて動いてみよう(身体表現)

5. 総括と次年度の課題

2020(令和2)年度から開始した月に1度の「なかよし音楽」(自立活動)は、特別支援学級の担任と大学教員との連携のもと数回の協議会を持ちながら進めていった。2021(令和3)年度、通算5回実施した「なかよし音楽」の時間の実践の成果は次の通りである。

第1には、ほとんどの児童が「なかよし音楽」の授業に楽しく取り組んでいることである。普段は1年生から6年生という幅広い年齢差を意識しながらも低学年向きのプログラムを進めることが多い。しかし、中高学年も楽器を扱う活動に興味を持ち、特に12月の授業では、個人の出番を多く持ったり手先の器用さを必要とする楽器を扱ったりして、高学年も満足できる活動ができ貴重な体験となった。また、1学期に全員で取り組んだ「ドラえもん体操」は、昨年2020(令和2)年度に取り組み始めていた身体をほぐす運動で、音楽に合わせて準備体操代わりに行ってきたものである。児童になじみのある音楽に合わせて身体を動かすことで、楽しく自立活動をスタートさせることができた。それを校内の先生方との交流会でも見ていただき、みんなの前で体操する役割の児童も張り切って活動することができた。さらには、なかよし2組で独自に行っている「にこにこ会」では、季節に合った歌を歌ったり、3年生で学習を始めたりコーダーを取り入れた曲を演奏したりしてきた。あまりリコーダーに興味を示していなかった児童も「ドレミをうつしていいですか。」と言って掲示している階名を用紙に書く姿が見られた。このように学校生活の中において、音楽が身近なものとなってきていることは大変喜ばしいことである。

第2には、特に気になっていた児童も「なかよし音楽」の活動を体験することでの変化が見られることである。昨年度は45分間参加することが難しかった児童も、今年度はその場においてみんなと一緒に過ごすことができるようになってきている。また、身体を動かしたり、友だちと合わせてリズムを打ったり、他者との関係の中で自らも参加してみようという姿が見られるようになってきている。また、情緒的に不安定な児童も、「なかよし音楽」の活動中・活動後には穏やかに過ごせる時が増えている。特に12月の授業後は、いつも拒否することの多いプリント学習に取り組む姿が見られた。これらの児童に共通しているのは、「なかよし音楽」に時間において、時に「やらない」と発言しても、「やってみたい」、「参加したい」という思いが垣間見られることである。その際には行動に移るまで可能な限り待つこと、あるいはその児童が活躍できる場面を設定したり、楽器を選定し、環境を整備したりすることが、彼らの「やってみたい」という思いを後押しする手立てになったと考えられる。

第3には、担任相互の協力体制が充実していることがあげられる。本学校には特別支援学級が4学級あり、担任もそれぞれに合計4人いる。そこで、中心になって進める教員とそれをサポートする3人の教員のチームワークが大切になってくる。掲示物を黒板に貼っていく役割、楽器を配布したり回収したりする役割、歌を歌う時に歌詞を言う役割、言葉や動きに困っている児童にそっと寄り添い声をかける役割等々、あうんの呼吸でそれぞれが動いている。日ごろからの関わりの中で積み上げてきたものがあり、自然と分担ができていく。さらに12月の授業では大学教員や学生も入り、細やかな支援を行うことができた。事前の打ち合わせをしっかりと行い、一人ひとりに寄り添った支援ができるようにしていきたい。

次年度に向けての課題としては次の2点があげられる。第1に、特に気になる児童への引き続きの指導・支援である。日常生活の中においても、音楽がクールダウンの一助となり得ることを願うとともに、担任教師との信頼関係を基盤にしながら、「なかよし音楽」の活動を継続していくことで児童の成長を見守っていきたい。第2に、次年度は、普段の45分間の学習の中にも、リズムを用いて身体機能を高める運動や、気持ちをリセットさせる活動をもっと取り入れたい。そして、これ

まで以上に音楽をふんだんに活用し、「聴く」力や他者とよりよいコミュニケーションができる能力を育てていく活動を新たな課題として取り組んでいきたい。

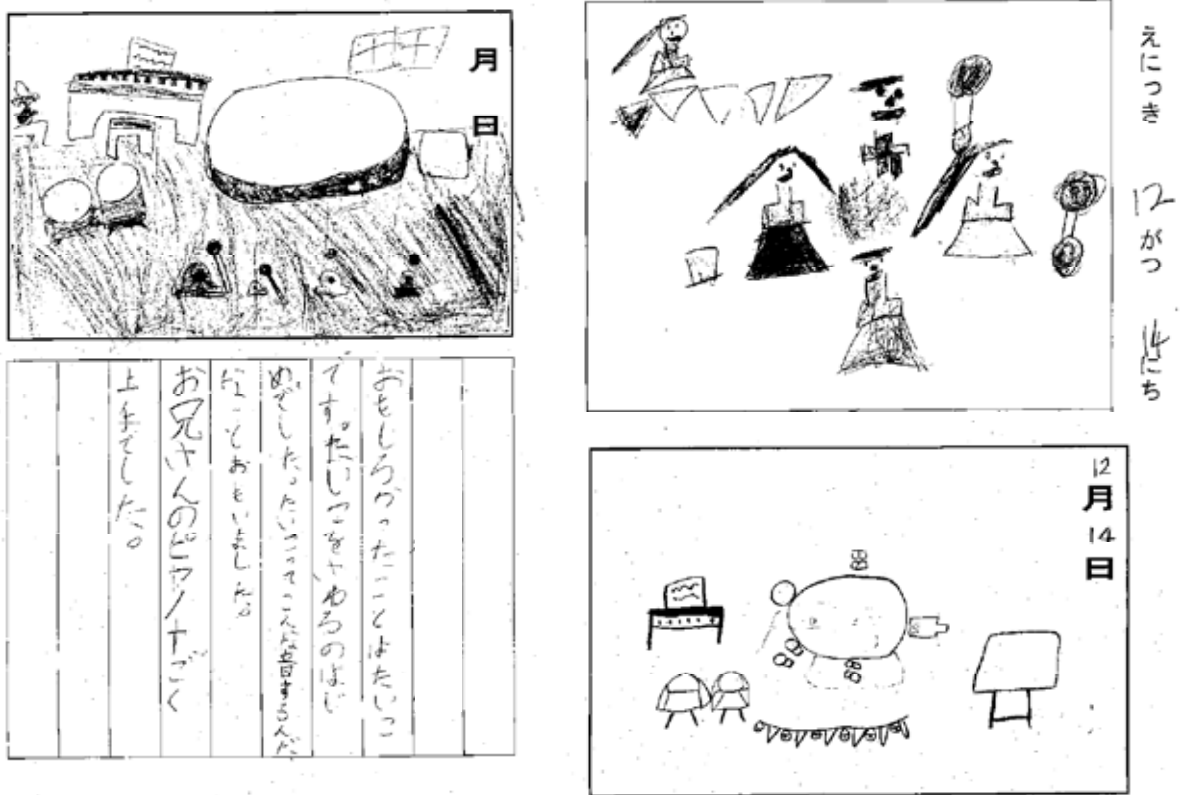


図1 「なかよし音楽」終了後(12月13日)の児童たちの絵日記より

<参考文献>

《こんにちは!》、《きょうは終わり》、《たいこをたたこう》、《シェイク・シェイク・ミュージック》ノードフ
＝ロビズ・センター編(2002)『音楽療法のためのピアノ小品集』ヤマハミュージックメディア。
《おたずねソング》生野里花・二俣泉編(2001)『静かな森の大きな木』春秋社。
《ドレミのうた》教育芸術社編(2003)『2訂版 歌はともだち』教育芸術社。